特集 高校の英語の授業を知ろう

発信へつなげる授業

中村邦彦
（長野県松川高等学校）

1．中学校から引き継ぐ指導

現在行っている高校では，以前感銘を受けたある中学校の活発な授業を参考に，授業を組み立てている。ここでは，中学校から引き継いで，高校でどのような授業展開をしているのか，主に「教科書本文を活用した指導」の観点から紹介したい。

参考にしている指導の８つのポイント
① １時間の授業で生徒の口からどんな英語がどれほどの分量飛び出すかを大切にする。
② 自分の世界の出来事について英語で語らせる。
③「言葉はキャッチボール」なのだから，生徒と生徒，教師と生徒が授業中に作る言葉がキャッチボールになっているかを意識する。
④「文字を見なければ頭の活動が機能しない」では英語は身につかないので，文字に向き合うばかりの授業にしない。
⑤ 反応速度を高める。すべての活動においてスピードを意識する。
⑥ 教師ではなく「生徒がリード」する授業をする。
⑦ 間違いを恐れず使い続ける。
⑧「授業で使えないもの」は「外でも使えない」ので，たくさん授業内で使わせる。

2．本文を活用した語句の導入

高校になると，さらに多くの単語，難しい語句が登場する。その導入の際，日本語訳との一対一の対応ではなく，中学校で触れてきた語句・文法をベースにし，文脈から推測して見つけさせるようにしている。たとえば，以下のような日本語訳を与え，生徒には本文から英語で語句を抜き出す作業をさせる。生徒が主体的に目を動かして英文を見ることから始める。（ここでは何度も覚えて使うことに精力を傾けるため，辞書の使用は控えている。）

１．成長して働く（大きくなって働く）
２．～であるほど十分に大きい

その後全員で確認をするが，確認作業では生徒に司会進行をさせ，他の生徒との間で次のやりとりを行わせる。

司会：Can you answer the questions from No. 1 to No. 5, Satoko?
Satoko: Sure! No. 1 “成長して働く” is “grow up to work.” No. 2 “～であるほど十分に大きい” is “big enough to.”.....
（教師が答えを板書）
司会：Thank you, Satoko.
Satoko：You’re welcome.
司会: Can you answer the questions.....

このように，答えの確認の際も，生徒に主体的に英語を使わせ，やりとりをする機会を与えている。

3．本文を活用した文法の導入

かつて文法指導は，文法の「準教科書」を使用してきたが，定着はあまりよくなかった。そこで普段のリーディング用テキストを加工し，意識づけをさせる。それぞれの英文に１か所の誤りを作り，訂正させることで，文法に「気づかせる」作業をする。

① In the 1950s all the boys in Coalwood grow up to work in the mine, and Homer Hickam thought he would, too.
② The only way to escape was to enter college with a football scholarship, but Homer wasn’t big enough be a football player.

併せて生徒に次のような活動をさせる。

司会：Can you answer the questions from No. 1 to No. 5, Taro?
Taro: Sure! No. 1, We should say “grew” instead of “grow”.

また，語順を意識したトレーニングも文法の定着には有効である。１文ずつの並べ替えもよいが，文脈の中で活動させることで定着を図る。

In the 1950s all the boys in Coalwood grew up to work in the mine, and Homer Hickam thought he would, too. ①逃れるための唯一の方法（way The only to to was escape）enter college with a football scholarship, but Homer ②〜であるほどじゅうぶんに体が大きくなかった（be big to enough wasn’t）a football player.

４．本文の読み

教科書の音読は，英語学習に欠かせない。中学校でたくさん体験しているであろう音読を，高校の授業でもしっかり取り入れている。しかし，様々なハードル（知識不足，練習不足，定着不足，日本語運用能力の不足）のために音読が困難で，意味を考えながらスピードを上げて読解するまでの余裕がない生徒もいる。意味を考えさせながらの音読にするため，また，スピードを上げた読解につなげるため，以下のような「虫食いプリント」を作成している。これは，単語の initial のみを示した読解プリントで，１人が穴埋めをしながら音読，もう１人が確認役でサポートする。単語編とフレーズ・文法編を用意し，１レッスンで６回ほど練習。回を増すごとに initial を減らしたり，日本語の一部を消したりしてハードルを上げる。

The boy’s science teacher, Ms. Riley, never 諦めた（g　）（u　）hope for her students. She told Homer, “Sometimes you really can’t listen to 誰かほかの人がいうこと（w　）（a　）（e　）says.

また，長文の読解の場合，文法などの細部にばかりとらわれないで，大きく内容をとることも大切である。質問に対する答えの部分に下線を引かせる作業を通して，内容を読ませる練習を行っている。

Question1: When did Homer decide to build a rocket?
（以下，教科書本文）----------

In the 1950s all the boys in Coalwood grew up to work in the mine, and Homer Hickam thought he would, too. The only way to escape was to enter college with a football scholarship, but Homer wasn’t big enough to be a football player.

<u>Then one day in 1957, everything changed. Sputnik, the first Soviet satellite, flew across the October sky — and Homer made up his mind to build a rocket.</u>

５．本文を利用した自己表現の練習

本文を訳読する代わりに，生徒に覚えて使ってほしい文章をいくつか取り出し，何度か話す練習をさせる。その後，自分に置き換えて表現させることで，自分を英語で語る体験をさせている。

But his father still <u>refused to</u> come to the launching.
①一息で５回読めるまで練習する。
②下線部を使用して，自分のことについて語らせる。

６．おわりに

これからの英語教育では「生徒に活動させる」だけでなく，「生徒に発信させる」までのプロセスをきちんと指導者が考えねばならない。それには，本文を読んでから，本文を振り返るような活動が必要だ。生徒が「自分を語れない」のは，発信するために情報を獲得しながら本文を読む，という授業・習慣になっていないためだろう。「目的を持って読む」というのは，従前から言われてきたことだが，これからの授業の中では「発信させるための情報を獲得・定着させるための本文の読み」という視点で読ませたい。これは中高を通しての課題ではないかと考える。

【引用文献】
三省堂（2012）「Rocket Boys」『VISTA English Series New Edition Ⅱ Step One』pp.52-56